〔2014年〕5月31日　土曜日　産経新聞　<第三種郵便物認可>

Opinion オピニオン

■解答乱麻■

「お手伝いしないの？」

参院議員　山谷えり子

<やまたに・えりこ> サンケイリビング新聞編集長、首相補佐官（教育再生担当）など歴任。１男２女の母。

某国立大学付属中学校で調理実習を参観したとき、包丁の持ち方の不器用さに驚いたことがある。

「お手伝いしないの？」と問うと、「しませーん。果物で食べるのはミカンやバナナ。リンゴはむかなければならないから食べない」「将来はコンビニのそばに住めば料理しなくていいでしょ」と、屈託のない声が返ってきて、おやおや和食が世界無形文化遺産になったのに、と心配になった。

もうひとつ気がかりなデータは、職業の背骨がはっきりせず、未婚率が高いことである。若年無業者（ニート）は63万人、フリーターは180万人で、新規大卒就職者の3割は3年以内に離職している。30代後半の未婚男性は36％、女性は23％となっている。

こうした現状に危機感を持つ教育界では、確かな人生の基盤づくりに「自然体験」「生活体験」が必要であることを以前にも増して提言し、実践も積み上げている。例えば、近所の子らとの遊びや冒険、手伝い、地域の祭り、地域清掃活動等の重要性が認識し直され、こうした体験の豊かな子は、意欲、文化的作法、規範意識が育ち、成人してからの収入や結婚生活が安定していくという調査結果も発表されている。当然だろう。

「家事をママにだけ押しつけるのはフェアじゃない」という思想の持ち主だった父のもとで、私は家事全員参加型で育てられた。トイレ掃除をすればトイレの神様が美人にしてくれると言われ、食器洗いをしながら料理上手の父母や農家の人々をリスペクトし、お日さまの匂いいっぱいの洗濯物をたたみながら家族の幸せを祈る時間を持てたことに感謝している。

日本人の家事をする姿は丁寧で、愛和の心を育み、自然と他者との関わりを悟る修行のように感じることがある。労働を苦役ととらえる欧米の労働観と、神話の中で喜び寿ぎ作業をなされた神々を父祖にいただく日本人の労働観の違いなのかもしれない。

現在、政府では成長戦略として外国人材活用拡大の議論がなされている。昨年11月、産業競争力会議の雇用・人材分科会で民間議員からは「女性が労働市場に参加するためメイドさんを海外から来ていただくような制度も検討しなければいけないのではないか」などの発言があり、今年4月の経済財政諮問会議・産業競争力会議合同会議では閣僚から幼児の人間形成期を外国人が担うことへの懸念や治安への影響からの慎重論も出ている。

外国人材の活用は文化摩擦、治安などのリスクの他、日本の若者の賃金が抑えられたり、就労困難を生じさせる心配もある。女性の活躍の推進は結構だが、家事、育児を労働とみなして外国人に外注化することが当然となっては日本の文化がやせ細ってしまう。

世界に例のないおもてなしや愛和の心は、祈りをこめて家事、育児を行ってきた中で育まれてきた面がある。中長期的な経済成長はどうあってほしいのか、若者は結婚をなぜためらうのか、人生の背骨である職業観をいかに育てるかを教育界は積極的に提言し問題意識を広く共有化していかないと、日本人力が心もとなくなろう。

現在、議員立法で「教育再生推進法」「家庭教育支援法」「キャリア（職業）教育推進法」（仮称）を検討中だが、政治の場だけでなく社会全体で取り組まねばならない課題と考える。